

Title	飢えと天職：封鎖下のレニングラードにおける文学と受難誌
Author(s)	武藤, 洋二
Citation	大阪外国語大学論集. 10 p.109-p.136
Issue Date	1994-03-18
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79624">https://hdl.handle.net/11094/79624</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 飢 え と 天 職

—封鎖下のレニングラードにおける文学と受難誌—

武 藤 洋 二

### ГОЛОД И ПРИЗВАНИЕ

—— Литература и народное страдание в блокадном Ленинграде ——

МУТО Ёдзи

#### Часть первая

- 1 Судьба хлеба
- 2 Хлеб——пробный камень.
- 3 Животное
- 4 Дважды два четыре и дважды два пять
- 5 Время

#### Часть вторая

- 1 “Душевное здоровье” в блокадной жизни
- 2 Призвание
- 3 Конец праздника

#### Примечания

### 第 一 部

#### 1 パンの運命

ドイツ軍は、レニングラード抹殺の仕事に食糧倉庫の破壊から始めた。ナチスは、外部からの補給路を断ってレニングラードを餓死させ、この旧都をつぶして、更地にする計画である。

1941年9月8日、ドイツ軍はシリスセリブルクを占領した。ラドガ湖にあるネヴァ河の出発点に小さな島があった。ノーヴゴロドをスウェーデンから守るため、1323年ここに木造の要塞がつくられた。最初、これは「小さなクルミ」と呼ばれた。この砦は、1611年にスウェーデン人に占領さ

れ、ノテブルクと改名される。北方戦争のさい、1702年にロシアがこれをうばいかえし、ピョートル大帝は、この重要な軍事的拠点をシリスセリブルクと命名した。これは、ドイツ語で「鍵の町」を意味する。ペテルブルクの創建者ピョートルは、宿敵スエーデン人の侵入にそなえて鍵をかけなおしたのである。シリスセリブルクは、ラドガ湖にある、ネヴァ河の出発点に付けられた外敵よけの鍵であった。今、これが史上最大の敵の手にわたったのである。

レニングラードは、外から鍵をかけられて、全国から切り離された。封鎖が始まったのである。

封鎖第一日目、市内が最初の集中攻撃をうけた。6327発の焼夷弾をあびた。一個が250から500キロもあるフガス弾48発が投下された。この猛火のなかでバダエフ食糧庫が灰になる。

食糧をごっそりうばわれた上で籠城がはじまった。食糧事情は、封鎖の第一年目が最も悪い。ソヴェト全体では、独ソ戦開始後、7月18日に大都市で配給制がとられた。一日のパンの配給量は、労働者800グラム、事務職600グラム、扶養家族（老人、子供、労働不能者等）400グラムである。レニングラードでは、この水準を維持することはできない。2ヵ月半ほどの間に5回もパンの配給量が減らされる。

すでに封鎖の一週間前、9月2日に第1回目の減量がおこなわれている。一日のパンの配給量は、労働者、技師、技術職には600グラム、事務職には400グラム、扶養家族（働けない高齢者や12才未満の子供）には300グラムである。

この低水準ですら10日しか維持できなかった。封鎖五日目、9月12日に第二回目の減量がおこなわれ、労働者、技師、技術職には500グラム、事務職と12才未満の子供には300グラム、扶養家族には250グラムとなった。第一回目とちがって、子供が、老人とではなく事務職と同量のパンを受けとるのは、成長過程にある者への配慮だとおもわれる。

10月1日に第三回目の減量がおこなわれる。労働者、技師、技術職には400グラム、事務職、扶養家族、12才未満の子供には200グラムとなった。三段階に分けることは、もはや不可能である。

パン以外の食物がほとんどなく、栄養失調で弱りきっているところへ、11月13日、第四回目の減量がおこなわれた。労働者は300グラム、その他の者は150グラム受けとる。労働者というのは、「労働者用切符」で配給をもらう者のことで、労働者でなくても、重要な仕事をする者にはこの配給切符が与えられた。

一週間後、11月20日におこなわれた第五回目の減量でパンは最小になる。労働者用切符を持っている者には250グラム、その他の者には125グラムである。このおやつのような量のパンは、燃料不足から生やけで、にぎりしめると水がしたたりおちた。火にあぶると、125グラムのパンは、ちぢんで一片の乾パンになる。

著者は、レニングラード市史博物館でこのパンを見た。125グラムのかたまりは、パンというよりも小さな石けんに似ていた。それは、やりくりの産物であった。

パンの成分

ライ麦粉の不良品	50%
塩	10%
油かす	10%
セルロース	15%
大豆粉	5%
粉塵	5%
ぬか	5%

第五回目の減量期は、11月20日から12月24日まで続いた。すでに本格的な寒さが始まっている。燃料はない。電気と水道は止っている。窓には板がうちつけられている空襲と砲撃の日々に、冷たい闇のなかで、この貧弱で不純なかたまりが宝物の地位につく。

封鎖後第一回目のこの冬に餓死者が急増した。

日常生活が非日常的異状さに達した時、パンや米が通貨になる。棺を作ってもらうにも墓穴を掘ってもらうにも、パンで支払う。たいていの者には、そんな経済的余裕はないから、死者は布につつまれて共同墓地へ運ばれる。

物の値段をきいて、「100で50」という答えが返ってきたら、たとえば、じゃがいもやキャベツ100グラムの値段がパン50グラムなのである。<sup>(1)</sup>パンがルーブリを正貨の地位から追いだした。貨幣単位が1キロのパンでなく、1グラムのパンである。パンくずが基準である。

これは、偶然に見つけたバターの包紙をなめて死期をのばし、配給のパンを一度に食べず細分して吸うという食生活の反映である。たとえば、毛皮のオーバーを粉にして、だんごをつくった人間にとって、パンくずは、いうまでもなく、れっきとした食物である。

「砲弾がパンの配給係の体を細々にふきとばした、埋葬すべきものすら無かった。しかし、血のしみこんだパンの一片が無事に残っていた。兵士たちは、このかけらを人間のように埋葬した。」<sup>(2)</sup>

これは、パンと命の関係が最も蜜になった状況にふさわしい葬いである。

ある病院で患者が医師にいう。

「『先生、私はあなたを神様のように待っているんですよ』

『あるいは——1キロのパンのようにね』と別の患者が訂正した。」<sup>(3)</sup>

パンは、神の座についた。

## 2 パンという試金石

自分のパンが少なければ、他人のパンが大きな力をもつ。

配給のパンを帰りみちで奪われたり、店で受けとる寸前に横からさらわれたりする。自分も飢餓線上で潜在的には同類だから、パン盗人をとがめることはできないと考えている者もいた。餓死のせまった家族をかかえているこの女性は、パンをもった小柄な女を見て、そのあとをつけたし、様子をうかがって奪おうとしたが、はっと我に帰り、自分の出来心にぞっとしたのである。<sup>(4)</sup>

他人のパンが自分の姿をうつす鏡になる。それは人間性の試金石になる。

五回目の減量がおこなわれたころ、ラドガ湖の氷上にか細い輸送路がついた。これは、孤立したレニングラードと外界とを結ぶ地上での唯一の道である。小麦粉をつんだ馬橋の一群がラドガ湖の氷の上を進んでいく。「命の道」が開通したのである。厳寒は多くの飢えた人間にとどめをさしたが、しかし、寒さのおかげで道がついた。これをつたって食糧やガソリンなどがトラックで運びこまれ、帰りには疎開者をのせていった。

この道は、死にかかった病人にさされた点滴用の一本の針であった。その微量の栄養で重病人は回復しないが、少し死が遠ざかったような気がし、少し希望がでた。この供給線のおかげで、12月25日、はじめてパンの配給量が増やされた。労働者、技師、技術職には350グラム、事務職、扶養家族、子供には200グラム配給されることになった。最低量が125から200へと、75グラム増えたのである。一口分だけの増量が大きな喜びを与えた。うれし泣きする者もいる。

しかし、このみじめな増量によって何も変わらない。飢餓線上から引き離すだけの画期的な増量がないかぎり、餓死者の数はへらない。絶対量が少ないとき、増量も減量と同じように悲劇のきっかけになりうる。

ヴァリャという女の子がいた。飼犬のシリヴァを食べる日がくるのを心配していたら、盗まれて食べられてしまった。パンが増量された日、ヴァリャはその喜びを日記に書く。

「41年12月25日。今日は特別の日だ！パンが75グラム増やされた。私の分は今度200グラム、ママも200グラムです。なんという幸せ。皆、うれし泣きしそうぐらい喜んでいいる！義父は今日がまんできないくらい嫌だ。あの人にひどいことをいうのは恥ずかしいことだけれど、私はもうがまんできない。あの人は自分のパンをたいらげたあとで、ママと私の分まで食べたのです。今日の増量分は私たちには関係ありません。

あの人が憎い！どうしてあんな浅ましいことができるのか分からない。」<sup>(5)</sup>

それから4日たって、ヴァリャにはパンの増量より嬉しいことがあった。

「41年12月29日。人にはいつも幸せがついてくるわけじゃない、といわれる。そう、これは部分的には正しい、しかし、今日は私にとって幸せな日だ！どうしてだって。義父ククリンが死んだので嬉しいのです。私はこの瞬間を待ち望んでいた！私はあの人をおそろしく憎んでいたのです。飢えがあの人汚い心をあばき、私は正体を知ってしまった。こいつは、めったにいないひどい卑劣漢だ。今日、あの方は死にました。夕方に死んだ。私は別の部屋にいた。おばあさんがきて、云いました、「死んだよ！」。はじめのうちは信じられなかったけれど、あとで私の顔は恐ろしい笑いでゆがんだのです。この瞬間の私の表情を見た者がいたら、私がなさけようしゃなく憎悪できる人間だといっただろう。あの方は死んだ、だが私は笑いました。私は幸せからとびあがるところだった、しかし体力がありませんでした。飢えのしわざだ。私はまともに体を動かすことすらできなかったのです。」<sup>(6)</sup>

身が飢餓にさらされると、空っぽの大きな胃袋のそばで心と頭が萎縮していく。心と頭が胃の

付属器官になりさがったとき、人は餓鬼になる。

飢えは脱衣婆である。それは日常性の衣を一枚一枚剥ぎとり、餓鬼の姿を見せる。ヴァリャは餓鬼を見たのである。

餓鬼は弱者である。パンを奪った義父が、奪われたヴァリャより先に死んでいる。一般的に餓死は、女より男の方に先におとずれる。古今東西の飢饉がこの実例を多く残している。義父が母と娘より先に死んだのは、この一般的傾向と関係があるかもしれない。しかし、もっと重要なものの働きがここにあらわれているように思われる。

生存条件の悪化に従って落ちていく者は、できるかぎりふだんのあたりまえさを維持しようとする内面的な闘いから落伍したのである。他人のパンを盗み食いすることによって、その分だけ熱量を得るにもかかわらず、全人間の規模での収支では損になる。他人のパンを奪い他人の命に危害を加えることによって、悪条件にたいする抵抗力を自ら失っていく。飢餓線上で平常の姿勢、行動原理からできるだけ離れないようにつとめる者は、まさにそのことによって状況と闘い自分を支えている。

小児病院にイリーナという女の子が入っていた。隣にねていた女の子がイリーナに、「わたしのパンを食べて、わたしは明日まで生きられないから」といった。子供のパンの配給量が一日に125グラムの時である。飢えが最終段階にはいると、体は何もうけつけない。食べて消化する体力すらなくなっている。イリーナは、ものすごく食べたい。しかし、もしイリーナがこの子のパンを食べたら、同室の子供たちは、イリーナが盗んだと思うにちがいない。飢えていても、イリーナは、他人の目を気にし、自分の誇りを傷つけられたくないという平常の心を失っていない。一晩中、食べようか食べないでおこうかと、悩み闘ったあげく、イリーナは他人のパンに手をつけなかった。夜が明けると、その女の子は死んでいた。たとえ食べても盗んだのでなく贈られたパンを正当に食べたことにしかならないのに、イリーナには、盗みの汚名をきせられたくないという精神的余裕を保つ能力があった。これは、砂漠の渇きにそなえてラクダがこぶの中に水を貯えているように、彼女が飢餓から自分を守る予備の力をもっていることを意味する。

他人のパンを食べるか否かという「自分との恐ろしい闘い」に勝ったイリーナは、生き残った。大人になったイリーナは、飢えた者は何でもしてかす、という人間観に反対している。<sup>(7)</sup>

自分にたいする勝利が生存の支えになることは、コルィマーの収容所群からシェラーモフが報告している。コルィマーのパンは、封鎖下の125グラムの代用パンよりはるかにましたが、長時間の重労働があるので、囚人たちは慢性の栄養失調と半飢餓状態にある。死は日常的現象である。

ある囚人が労働現場へ出るために、パンを仲間にあずけていった。これは絶大な信頼をあらわす。あずけられた者は、飢えのなかでその信頼にこたえるか、こたえられるか、という試練にあう。彼は、イリーナと同じく、同室の者の目を気にする。彼は一人一人の視線を調べる。彼は眠れない。パンの入った小さなトランクがまくらもとにある。眠ろうとして、千まで数え、起きあがった。

「私は、トランクをあけて、パンをとりだした。これは、300グラムのやつで、木片のように冷たかった。私は、それを鼻に近ずけた、鼻の穴がかすかにそれと分かるパンのかおりをひそかに嗅ぎとった。私は、このかたまりをトランクにもどし、またもやとりだした。トランクをひっくりかえして、手のひらへいくつかのパンくずを落とした。私は、それを舌でなめ取った、すぐに口の中がつばで一ぱいになり、パンくずはとけてしまった。私は、もうそれ以上まよわなかった。パンから小指の爪ほどの大きさの小さなかけらを三つむしりとり、パンをトランクにもどし、よこになった。私は、パンのかけらを小さくちぎり、それをしゃぶった。仲間のパンを盗まなかったことに誇りをいだいて、私は眠りついた。」<sup>(8)</sup>

他人のパン300グラムをまるまる盗って得られる熱量よりも、小指の爪三つ分のかけらでとめておいた精神力のほうが、生きぬく役にたつことを、シャーモフは伝えたのである。

### 3 動物

街頭から犬や猫が姿をけした。家で飼っている犬や猫が盗まれる。

ワンワンも、ニャオーも、チュンチュンも聞えない<sup>(9)</sup>

ふだんの生活のなかでは嫌悪の対象であるこれらの肉を食べた者、他の肉だといつわって食べさせられた者は、うさぎの肉やかしわに似てうまかったという。極度の飢えが味つけする。

人間研究にとっては、犬や猫まで食べたという事実よりも、食べる人間と食べるのを拒否する人間とに分かれたことが、重要である。

犬や猫を食べることも食べるのを自分に禁じることも共に、生きぬく手段、方法、姿勢の問題である。

文化的に、伝統的に禁断となっている食物をとらないこと、食生活のなかで平常から異常へ落ちることを自分に許さないことも生きる有効な方法であった。飢え死の危険性があっても飼い犬に手をつけないこと、動物と自分とが以前のように自然な、あたり前の関係にあることは、犬のはえる声も猫のなき声も聞こえなくなった封鎖下の世界では、一つの強靱な姿勢となる。

極限状況のなかで、できるだけふだんの生活を続けていこうと努力することは、それ自体一つの生きる手段となる。ある母親は封鎖中ずうっと子供たちに歯をみがかせた。歯みがき粉も歯ブラシもないから、みがかない、ということを認めなかった。子供たちは木炭で歯をみがいた。<sup>(10)</sup>この平時の習慣をまもるだけでも一家は精神的に支えられる。この家では飼い猫を食べなかった。歯をみがくことと飼い猫を食べないことは共通性をもつ。

正常さを、たとえ全面的でないにしろ、たもち続けていくことは、自分たちに強制されている異常な生存条件への抵抗になる。これが生活の芯になる。

シャーモフのいた収容所でも犬や猫が食べられる。しかし、ここにも絶対にそれらを食べない者がいる。それは、収容所以前の自分にとってのあたりまえの生活を、原則として続けようとする者たちである。あたりまえの、ふつうの日常生活の条件が奪われた所では、これは、しばし

ば非日常的な意思力を要求する。あたりまえでない所であたりまえであろうとするには、非日常的な次元の精神力が必要である。

ブラターリと呼ばれる職業的犯罪者たちが、収容所で小犬を殺し、煮てたべた。肉があまったので、なべを洗わすために、囚人の一人であるザミャーチン神父に、羊の肉だとだまして、与える。飢えている神父は、あっというまにたいらげた。ブラターリたちが、カモメなみの早食いだとかきれるほどである。神父は、それほど空腹であった。ブラターリは、それが神父のところへよくきていた小犬の犬だと教えてやる。

犬や猫を食べることは、いうまでもなく、善悪の問題ではない。

大トカゲを食う民族がタコを食う民族より下品だとはいえない。鯨の肉を食糧にしている国が牛肉ばかり食べている国より野蛮なのではない。ここで問題なのは、ある個人にとって、たとえば、犬の肉を食べることが、自分の精神的道徳的禁忌の一つであり、それが自分の生きる姿勢や価値観に反し、自分が守り守るべきだと考えている習慣を破る行為であり、あたりまえの自分の崩壊につながる場合である。これは、犬を食べることが自分への裏切りになる場合である。

犬を食べることが忌み嫌われる文化的伝統の中で、聖職者が犬の肉を食べれば、破戒のたぐいをおかしたことになる。もしザミャーチンが、コルィマーの収容所の生活条件をたてにとって、娑婆での姿勢をくずし、犬の肉を食べれば、神父であるという状態はなくなる。彼にとって犬の肉が試金石になる。神父ザミャーチンは、吐いた。

「『ひどい奴らだ』と私はいった。

『そのとおりだ。しかし肉はおいしかった。羊の肉に負けないくらいだよ』とザミャーチンはいった。」(11)

飢えだけでなく寒さにさらされているとき、あたたかい肉料理は強烈な誘惑である。日本では江戸時代に食犬の禁令が出されるほど、身分の低い者が犬を食べた。犬の肉を食べると体があたたまるといわれ、冬の江戸では犬が姿を消した。

神父ザミャーチンにとって、犬の肉は悪魔であった。キリスト教では悪魔は、試みる者であり、誘惑者である。そのさそいにのれば信仰は無になる。誘惑に打ち勝つことは、自分自身であり続けることを意味する。ザミャーチンは、犬の肉を血肉化することを拒絶して、天職にとどまる。彼は、食べて生き残ろうとするのではなく、食べないことによって生き続けようとする。

神父であることそのものが、劣悪な生存条件の克服の形態になる。もし神父から脱落すれば、彼は、飢えや寒さや重労働や絶望によって傷めつけられ、死へむかうだろう。

だから、神父であるという、平常では彼にとってあたりまえのことが、ここでは最大限の目標であり、同時に、最後の、ゆずることのできない地点となる。天職を守ることが生存のための闘いになる。

小犬の肉がもたらすはずの熱量、栄養はどうなるのか。

封鎖下で弱りきった人間は、少しでも体を動かさないようにした。熱量を節約するためである。



ところが、ある母親は、「横になるな」という規則を子供たちにおしつけた。医学生の子が、熱量の節約という医学の常識を説いた。しかし、息子の合理性よりも母親の「横になるな」の方が生きぬく助けになった。掃除をし、室内を整頓する。異常な状況によって、あるべき姿をできるだけ割引かないようにする。動くことによって、衰弱しきった体から熱量が失われていくのに、生きる力が増えた。(12)

熱量は体に奉仕しても、人間存在を丸っぱ支える能力がない。一片のパンを盗んだ者は割にあわないことをしたのである。パンを奪った者が奪われた者より先に死んだのは不思議ではない。胃に入った盗品が人間全体の支えをゆるめてしまう。満ちたりた胃袋が空っぽの胃袋より人間に役に立つとはかぎらない。飢餓状況のなかで胃が独裁者になることによって人間を減ぼす。弱者は早く餓鬼になる。

ある家で猫を飼っていた。一家の人気者だった。封鎖が始まって、食物が底をついたとき、母親は猫を殺して食べた。娘は食べるのを拒絶し、図書館で毒のつくり方を調べ、自殺した。(13)

娘は減びたのではなく、自決したのである。

人にはこのように生きる権利もある。

#### 4 2・2が4と2・2が5

若い母親ジェーニャに2人の子供がいた。上が男の子、下が幼ない女の子である。子供が2人とも育つ可能性は少なかった。2人とも餓死するだろう。ジェーニャにできるのは、ただ算術をすることだけであった。彼女は、息子を生き残らせることに決め、女の子の食物を息子にまわした。母親から死刑宣告をうけた幼い娘は、数日のあいだ泣き続けてから餓死した。 $2 - 1 = 1$ で、母親は丸損ではなく、1を手にした。封鎖の最初の冬のことである。

ジェーニャの手もとには息子という確かな1がある。同時に、娘がいけないということも絶対的な事実である。生を1、死を-1とみなせば、母親の手もとにあるのは0である。彼女の算術 $2 - 1 = 1$ は、人間むきではない。彼女が手にしたのは $1 + (-1) = 0$ なのである。

ジェーニャが娘の死を息子の生に対して-1であると計算しないのは、娘を手段とみなすからである。 $2 - 1 = 1$ は、犠牲を正当化する者の数式である。

ジェーニャに娘を犠牲にさせたのは、ソヴェトを国ごと奪うために侵入してきたドイツ軍である。しかし、ソヴェト権力もまた民衆に残酷な算術をさせた。封鎖の10年ほど前、農民集団化のさい、飢餓状況のなかで、ある母親は6人の子供のうち3人に食物を集中し、3人を犠牲にし、3人を育てあげた。(14)

封鎖の始まった日の空爆で頭に白髪があらわれた28才のリージャは、この時から2人の子供を餓死と凍死と爆死と病死から守るために、闘い始める。ジェーニャと同じく、彼女の上の子は男で、下は幼い女の子である。ジェーニャは、共だおれをふせぐために2人のうち1人を選ぶようにリージャにすすめた。子供が2人とも餓死する危険性を認めながらも、リージャは選択をしな

かった。彼女はジェーニャの残酷な合理性をしりぞける。

死体から干からびた皮ふを切り取り、それでスープをつくって子供にのませた者がいた。子供を死なせないためにこのようなたぐいのことをしなければならぬ封鎖下で、リージャは、子供を2人とも救えるところまで救おうとする。娘のニーナは、まだ赤ん坊で、乳をはしがる。しかし、飢えた母親のやせこけた胸には乳房が消えている。ニーナは泣きやまない。ジェーニャは娘の泣き声に耐えて見殺しにしたが、リージャは自分のうでに針をつきさし、血を出して赤ん坊にすわせた。ニーナは母親の血を吸いながら眠りついた。厳寒のなかで暖房はなく、壁にはつららがさがり、室内には戸外と同じ冬景色があった。

パンが5日間とだえたとき、リージャは、力つきて、ひざまずき、神を信じたこともないのに、祈りはじめた。親子3人が同時に死ぬるように祈った。次の日、前線にいる夫がつかわした使者が食物をもってあらわれた。(15)

リージャは、最初の冬をのりきり、3月には「命の道」をつたって疎開することに成功した。封鎖下で子供の命を守ることができたのである。死の危険を脱して、安全地帯に入ってから、ニーナが病死した。血を吸わせたあの子である。(16)

リャビンキン一家もまたジェーニャやリージャと同じく、母親、息子、幼い娘からなる。父親は、他の女性と結婚し、1937年に逮捕され、ウファーへ流刑になっている。

息子ユーラは、封鎖が始まったとき、16才になったばかりである。この年令の男の子にとって、封鎖下の食生活は拷問にひとしい。ユーラは、飢えて力がないだけでなく、もともと病弱である。彼は、独ソ戦が始まった1941年6月22日から日記をつけ始め、歩くことすら困難になるほど衰弱しても書き続ける。彼は、自分のあさましさを記録し、自己分析し、自己嫌悪におちいり、封鎖下の異常な状況におかれている自分を平常時の常識から批判した。

「10月21日。朝の8時から夕方6時まで学校で当直した。今日とはともかくも腹の虫を退治した。正確に言えば、水ぜめにした。」(17)

生徒たちは、ドイツ軍の砲撃や空爆にそなえて、学校の屋根裏で当直する。屋根に爆弾がおちたら消火するためである。空腹の対策には水しかない。

封鎖の第一回目の冬がきた。このころユーラは、朝はビスケット100グラム、昼は何もなし、晩はスूपーばいだけという食生活をする。(18)お腹がへってたまらないユーラは、水を沢山のんで、日に日に弱っていく。やせ細った自分の体が重く感じられる。少ない体重を支える力すらつきようとしている。しかし、彼は、状況論で自分を甘やかさない。自分が飢えのあまり何をしかしたかを列挙する。

「猫を食べた、アンフィーサ・ニコラーエヴナの鍋からさじですくって盗み食いた、ママとイーラの分をちょっとくすねた、ときどき2人をだました、えんえんと続く行列に立っていて凍え、店の戸口で100グラムの油を受けとるために罵り、けんかした……」(19)

少年は、「自分の粗暴で利己的な性格」について考えこむ。16才の胃袋を理性の支配下におく

ことは至難のわざだから、母親と妹ユーラの食物をとったりすることがある。そのような自分に宣告を下す。

「だらしなさ、良心の完全な欠如、恥知らず、恥という名の深淵へぼくは転げ落ちた。母親には不肖の息子で、妹には不肖の兄だ。利己主義者で、つらい時には身近かな者も身内も皆わすれてしまう人間だ。」<sup>(20)</sup>

「ぼくは破滅した人間だ。人生は終わった。前途に待ちうけているのは、生ではない、今二つのことが願わしい。死ぬこと、自分で、今。この日記はママが読んでくれたらいい。汚ない、冷淡な、偽善的な動物であるぼくをママが呪ってくれたらいい、ぼくを勘当してくれたらいいのだ——ぼくはあまりにも墮落した、あまりにも……」<sup>(21)</sup>

ユーラの最後の望みは、死と食物である。

「ぼくは本当に自殺するのだろうか、本当に？

食べたい！食物を！」<sup>(22)</sup>

死と食物は矛盾しない。この二つはともに今の状態からの救済の手段である。

ユーラには、全世界がパンに、パンが全世界におもわれる。そんなユーラがパンにたいする態度をあらためたら、ママも妹も自分にやさしくなった。これはユーラにとって大きな教訓になる。

飢えに寒さが加わって死者が急増する。ユーラは疎開を夢みる。日記は祈りに変る。

「神様、どうかぼくを救って下さい、ぼくに疎開を贈物にして下さい、3人皆を、ママもユーラもぼくも救って下さい！」<sup>(23)</sup>

疎開という「運命の女神の最もありがたい贈物」を神様からもらうために、ユーラは誓いをたてる。

「忌まわしいペテン師的生活から永久に足を洗い、どこか田舎で誠実な勤労生活を始め、ママに幸福な黄金の老後を贈ることを命かけて誓います。」<sup>(24)</sup>

封鎖下の3ヵ月で16才の少年は瀕死の老人に変わる。神への誓いから2日後、ユーラは自分の衰弱ぶりを記録する。

「1月6日……歩くことも働くことも全くといっていいほどできない。ほとんど完全な無力状態。ママもやっとのことで歩いている——ママが歩くさまを思い浮かべるのはつらくてできない。ママは、このごろ、しばしばぼくを打ったり、罵ったり、大声をあげたりする、すさまじい神経発作をおこしている、ぼくのどうにもならない姿——かろうじて移動できるだけで、足手まといになり、病人と衰弱者の『ふりをしている』力つきた、飢えた、疲れきった人間の姿——を見るにしのびないのだ。しかし、決して仮病をつかっているのではない。ちがう！仮病なんかじゃない、力が……体からぬけていく、ぬけて、溶けていく……時間がすぎていく、ゆっくりゆっくりと！……ああ、自分の身に一体なにがおこったのだろう。

今、ぼくは、ぼくは、ぼくは……」<sup>(25)</sup>

こうして書く力もつきた。ユーラが歩くこともできなくなってから、一家に疎開の許可がでた。

重病人なみの体力しかない母親にはユーラを運ぶことができない。彼女はイーラをつれて駅にむかった。この封鎖の地からの脱出を祈ったユーラは、おき去りにされた。

母親は、自分の意思に反して、あの選択をしてしまったのである。

日記から判断して、ユーラが並の少年でないことは明かである。その判断力、分析力、厳しい自己批判は、極めて早熟で知的な青年のものである。この国を代表する歴史学者タルレが、かつて母親にいった、「息子さんには前途洋々たるものがあります。あの子を大切にしてください。」<sup>(26)</sup>

母親は駅へむかう道すがら「ユーラが残っている」とくりかえし叫んだ。ユーラは、そのころもう死んでいた。正直に生きて、母親を幸せにするという誓いもむだになった。

母と娘は、レニングラードを脱出することに成功し、ヴォーログダ駅へ無事についた。その夜、母親は眠ったまま死んだ。小さな娘を安全地帯へ連れていくために残りの力がすべて使いつくされた。ユーラが最後の日記を書いてから20日後のことである。母親の選択のおかげで、女の子は生き残り、大人になることができた。

## 5 重 荷

極度の受難は血縁関係をゆがめる。どの子を生きのびさせるか、という選択の強制は、しばしば子供殺しにいきつく。極限状況では、人はたえずこの選択のさまざまな変種につきまといられる。

餓死は、とつぜんやってくる。道を歩いている夫が急に死ぬと、いっしょにいた妻にはその死体を運んでいく力がない。たいていの人間は、自分が歩くだけでせいっぱいである。ある現象が一般化すると、それに対する生活の知恵がうまれる。封鎖開始後の最初の冬、餓死者が急が増えところ、ある夫婦が通行中に夫が死んだ。皆とおなじように弱っている妻は、凍てついた道で遺体を持ちさることができない。事情を知った通行人が、妻ではなくあかの他人のふりをしなさい、身よりのない死体は民警がしまつしてくれるから、と忠告してくれた。たった今、未亡人になったばかりの女は、その忠告に従って立ち去った。<sup>(27)</sup>

生者が死体予備軍に入っているとき、生と死の差がちぢまる。他者の死が平常時の重みを失う。肩をならべて歩いている夫が死んだとき、妻をおそったのは悲しみでなく、死体をどう運ぶかという困惑であった。

死の軽量化は、二重である。生の畸形化と連動して死が軽くなる。飢えによって脂肪も肉もうばわれ、内蔵まで燃焼して、餓死者の体は軽くなる。死体の物理的な軽さは、死の軽さそのものにふさわしい。この軽い死体が生ける餓死者にとって、運ぶことのできない重荷であった。死が軽いから、この重荷が捨てられたのである。

死がパンより軽くなることもある。夫がいつまでたっても帰宅しない。妻は子供をさがしにいかせる。もし倒れていて運んでこられなかったら、ポケットから配給券だけとってきなさい、と母親はいう。生存条件が好転すれば、遺体とパンの重みは逆転するだろう。

人間は、一般的に、生存条件の目盛りに従って上ったり下ったりする。しかし、目盛りの数字

が下がっても、自分自身を下げない者、ずり落ちていきながらも平常点にしがみつこうとする者もある。そのような人間には、身近かな者の死がその当然の重さを保つだろう。

他者の死だけでなく自分の死も軽くなっていく。エンゲルス通りで爺さんが、死体を満載した荷籠をひいていた。その後からどこかの婆さんがやっとのことでついていく。しかも、のせてくれとたのんでいる。

「婆さん、どんな荷をつんでいるのか目にはいらんのかね。」

「分ってる、分ってるよ、私もそこへ行くところでね。きのうパンの切符を失ってしもうた、どっちみち死ぬんだから、うちの者が遺体を運ぶのに苦労しなくてもいいように墓地までのせてくれんかね、木の切株に座って凍え死ぬよ、そしたら埋めてくれるからね。」<sup>(28)</sup>

このやりとりを聞いていた通行人が、婆さんにパンのかけらを与えた。一口のパンが婆さんの運命を変えたかどうかは不明である。

## 第 2 部

### 1 封鎖下の「精神的健康」

文学界にも荒れ狂った30年代の肅清と人間狩りを、スターリン体制への奴隸的奉公によって切りぬけた二流詩人ヴェーラ・インベルは、封鎖下のレニングラードで住すはめになった。

インベルの夫イリヤ・ストラシューンは、レニングラード第一医科大学の学長に任命された。戦争が始まったら、一緒に住すべきだという夫に従って、インベルは、1941年8月24日モスクワからレニングラードへ移った。ドイツ軍が独ソ不可侵条約を破ってソヴェトへなだれこんでから2ヵ月たっている。ドイツ軍は、占領地を急速に拡大し、赤軍は、後退していく。短期決戦をめざすドイツ軍は、レニングラードへ大軍でせまってくる。

レフ・トルストイ通りにあるパーヴロフ記念レニングラード第一医科大学の前身は、1897年に創立されたロシア最初の女子医大である。1835年にペトロパヴロフスカヤ病院として出発したエリスマン記念病院がこの大学の管轄下にある。夫がこの巨大な医療機関の最高責任者であるため、インベルは、このそばで、このなかで日常生活をおくり、死者や負傷者や餓死寸前の者の大群に接し、自からも患者たちに奉仕活動をおこない、封鎖の惨状を人一倍しることになる。

故郷のオデッサはドイツ軍に占領された。ソヴェト第三の都市で、インベルの出身地ウクライナの首都キーエフも占領されている。レニングラードは砲撃と空爆の下にある。インベルの至近距離に爆弾が落ちた。インベルは、文筆を職業にする者として、人類史上最大の戦争の修羅場で記録をつけ始める。

「それでも、毎日の、毎時間ごとの危険にもかかわらず、ジャンナとその男の子<sup>(1)</sup>にまた会えるものやら分らないにもかかわらず、病気にもかかわらず、私は、このような精神的健康、仕事へのこのような意欲を長いあいだ感じたことはない。私は、今、たくさんのことをやりとげら

れる。爆弾が昨日よりもうちちょっと近くに落ちるようなことさえなければ、私はやりとおすだろう。」(1941年11月6日)<sup>(2)</sup>

「精神的健康」は、二つのものによってもたらされたと考えられる。第一は、危機的状況にさいして活発になる天職の作用である。天職を持つ者は、極度に困難な状況下で天職を生命力の全転開の場にかえようとする。天職に憑かれている者は、負の条件を薪にして仕事の火の中へ投げこんでしまう。

天職にはまた防御力がある。人生の敗残者になりそうな逆境のなかで、天職が砦になることがある。死神から身を守る砦にもなる。

インベルは、連日数時間から8時間休みなしに続く猛爆の下で、かつてない仕事への意欲を感じる。封鎖されながら爆弾をあび続けると精神だけでなく肉体もおかされる。医師たちは「爆撃後遺症」という新しい病名を登録した。それは、たえまない爆撃から神経が緊張し、高血圧症になることである。死者のうちの3人に1人がこの病気がもたになっているといわれた。<sup>(3)</sup>

死の危険性が仕事を加速させる。それは、死神とむきあう代りに仕事に没頭することによって自分を守る行為でもある。<sup>(4)</sup>

死と連動した病的な状況のなかでインベルは、仕事への意欲という「精神的健康」を手にしたのである。

第二は、1930年代の精神的不健康からの部分的回復である。これは、恐怖から余儀なくされた二重生活からの部分的開放である。

ソヴェト権力は、自分の国をドイツ人のための奴隷国家にかえようとして侵入してきた敵に勝つために、あらゆる力を結集しなければならない。国内の大同団結のためには、思想や芸術の弾圧、宗教の迫害を国家的運動として大々的にやるのをひかえる必要がある。万人万物を戦争に投入するために、そしてまた、同盟諸国のソヴェトにたいする評価を高めて援助をひきだすために、さらには第二戦線をつくらせるためにも、ソヴェトでは宗教活動が認められている、<sup>(5)</sup>ユダヤ人の文化も花咲いていることを外国に示さなければならなかった。戦争のための实际的利益をひきだすために、今までのやり方を修正することになった。本質はそのまま効利主義的に変身することは、スターリンの得意の芸である。

独裁者の素人判断による戦争指導の失敗から多くの人命が失われ、軍の後方に政治警察がひかえて後退する兵士を射殺し、捕虜になった自国の兵隊を祖国の裏切り者としてあつかい、落度のあった軍人を処分するさい家族まで罰せられ、ドイツ軍への協力者、スパイとして民族全体を強制移住させるなどスターリン体制の中世的性格が戦時の生活をさらに暗くしている。しかし、国家権力は、民衆抑圧の装置を平時のように作動することはひかえていたのである。

ナチズムの悪がスタリニズムの悪の片手をしばった。

戦争によって余儀なくされたスターリン権力の譲歩と変装は、知識人に一種の解放感をいだかせた。これがインベルの精神にも作用する。

パステルナークは、ソヴェト史全体のなかで独ソ戦を考察し、知識人が戦争によってある種の安堵を感じるという異常性を、スターリン体制そのものの本質から説明する。『ドクトル・ジヴァゴ』のドゥドロフ少佐がそれを語る。

「戦争は、浄化の嵐<sup>(6)</sup>、新鮮な空気の流れ、解放の息吹だった。

農民集団化は、偽瞞的な失策だったのに、誤りだと認めることができなかったのだと思う。この失敗を隠すため、あらゆる脅迫手段を使って、人が判断したり、考えたりする習慣をやめさせ、有りもしないことを見させ、逆様事を証明する必要があった。ここからでてきたのが、エジョーフ<sup>(7)</sup>の恐怖政治の前代未聞の残酷さと、実施するつもりもない憲法の公布と、選挙の原則にもとずかない選挙制度の導入だ。

戦争が没発したとき、その実際の惨状、実際の危険性、実際に死ぬという脅威は、虚構の非人間的な支配と比べれば、ありがたいことであったし、安堵をもたらした、なぜなら、死文化したものの魔力を弱めてくれたからだ。」<sup>(8)</sup>

「虚構の非人間的な支配」とはスターリン体制である。ジヴァゴ医師によれば、ソヴェト体制は、「未熟な虚構から成る子供っぽい道化芝居」<sup>(9)</sup>であり、一筋なわではいかない現実をたいする革命家たちの無力なくわだてである。

新しい農奴制をつくりあげた農民集団化は、農民の理想郷への入場式として描きだされる。スターリン憲法といわれる「モスクワ裁判」第一年目の1936年12月5日に採択された憲法は、単なる「死文」ではなく、現実を隠し、制度を偽装するための宣伝的虚構となる。非現実を信じこませる強制装置が、たがとなって全社会を縛り、ソヴェト人はその装置へ入力された人工の世界を信じるふりをするだけでなく、讃美することを義務づけられ、裏と表の、二重の精神生活を強いられた。

ここへ独ソ戦というかけ値なしの現実がわりこんできたのである。独ソ戦の最中、ソヴェト人は本物の敵にめぐまれた。スターリン体制は、敵をつくりだすことによって絶対的権力を維持してきた。敵は、自家製の敵は、スターリン体制の支柱であった。ところが、今、にせの敵——悪政の犠牲者——でなく、本物の敵がいる。たとえば、「人民の敵」を義務として批判させられた時の良心のいたみは、ドイツ軍という外敵との闘いでは全く経験しなくてもすむ。まようことなく、本心で、全力をだして闘えばいい。二重性、うしろめたさ、恐怖ゆえの嘘など精神的不健康から脱却できる。この戦さのなかでは自分の良心を操作するてまがいらぬ。

1930年代に自国の地獄の火中で命びろいした知識人が、1940年代になって外敵との戦争にはっとさせられる。これは、シャラーモフの「ロシヤ的幸福」をおもいださせる。何の罪もない者が5年の刑になった。それをきいた者が、10年の刑でもなく死刑でもなくてあなたは幸運だといった。これが「ロシヤ的幸福」である。<sup>(10)</sup>何もしていないのに死刑にされることがあるという構造的不幸がなければ、無実の者への5年の刑が幸運にはならない。史上最悪の敵を、たとえどのような程度であれ、「安堵をもたらす」と感じるの、人をストレス漬けにする不幸な体制のな

かでのみありうる幸福、「ロシア的幸福」なのである。これは、スターリン体制のおかげで知識人があじわうことのできた唯一の精神的「幸福」である。

1930年代のインベルは、生きるために、殺されないために、「虚構」を維持する仕事の一たんをかつぎ、「逆様事を証明する」任務について手柄をたて、勲章までもらった。

今、インベルは、封鎖下の都市、独ソ戦の修羅場にいる。生存条件が極端に悪化すると、平時のまよいはなくなっていく。心の重荷と汚れを戦火の中へ投げこむ機会が彼女にもあたえられた。戦火が浄火になる可能性があった。

『ドクトル・ジヴァゴ』のドウドロフ少佐は、スターリン体制の日常から戦場への移動を、息苦しいよどみから輝かしい活動舞台への転進だと感じている。

「後方でも前線でも皆が皆はっとして、胸一ぱいに呼吸して、死をもたらし救いをもたらし激戦の炉へと、酔ったように真の幸せをかみしめながら、身を投じた。」<sup>(11)</sup>

インベルもまたこの炎の変種に身を焼くことになる。民衆が狩られているとき、自からの保身救命のために権力に媚びて、ソヴェト体制がもたらしたものは「喜び」という言葉に集約されると書き語ってきた詩人は、この炎のなかで少し恐怖から醒める。封鎖の日誌『ほとんど3年』では、スターリンは歴史的に必然性があるときにだけ姿をあらわす。讃美するためにわざわざ独裁者を登場させていない。1938年の『旅日記』と封鎖の記録とのちがいは歴然としている。前者ではグルジャへの旅そのものがスターリン崇拝のための巡礼であり、後者では主役は自分であり、封鎖下で自分と同じ苦しみをなめている民衆である。

このちがいは、たんに「浄化の嵐」が生みだしたものではない。

インベルの恐怖の大本が入れ代わったのである。

ナチスはソヴェト体制壊滅だけでなく、ユダヤ人絶滅<sup>(12)</sup>を叫びながら進撃している。ヒトラーにとって、ソヴェト権力は、ユダヤ人権力であり、ユダヤ人による世界支配の一形態であった。したがって、ナチスにとって、ソヴェトのユダヤ人は最悪であった。ドイツ軍がレニングラード市内に入ってくれば、ソヴェトのユダヤ人であるインベルが助かるみこみはない。

インベルが生れたオデッサは、1941年10月16日にドイツの同盟国ルーマニアの軍隊によって占領された。ルーマニアには、独裁者アントネスクによってファシスト体制がしかれ、ルーマニア軍はナチス・ドイツの手下になっていた。オデッサにおけるユダヤ人虐殺について、インベル自身が後になってから、生き残ったユダヤ人たちの証言をもとにして書くことになる。半身不随のユダヤ人がベッドから引きずり出されて吊るされたこと、医者がねらいうちされたこと、犬がユダヤ人の死体を食べて肥えていること、大量の死体を焼く火が黒海からブグ河までの地帯を照らしていることなどをインベルは伝えるはめになる。

「子供に弾丸を浪費するようなことはなかった。子供たちは、頭を電柱や木に打ちつけて割られたり、このために用意された焚火へ生きたまま投げこまれる。母親は引きはなされ、幼い子供たちが死んでいくのを見て彼女たちのあわれな心に先に血を流させるため、彼女たちをすぐには



殺さない。」<sup>(13)</sup>

ドイツ軍が防衛線を突破してレニングラード市内へなだれこんできた日から、インベルたちユダヤ人は、オデッサのユダヤ人と同じめにあうだろう。

「われわれがどうなるか、私の身に何がおこるか、分らない。

私は何も知らない。私は重苦しい気分で、しかも、とても恐い。こう書くのも別に恥ずかしくない。私は恐い。今日ドイツ軍が大変近くまでせまったとマリエツタが云った。」（1942年3月31日午後9時）

ドイツ軍によって抹殺される恐怖が、ソヴェト国家権力への恐怖と交代する。

憑きものの交代によってインベルは、今までとはちがった創造の態勢へ入れる。ドイツ軍との闘いに全力を投入する。そこから詩が、散文が生まれる。封鎖は単なる苦しみでなくなる。封鎖下のレニングラード全体がインベルの仕事場になる。

詩人オリガ・ベルゴリツは、封鎖下で夫と2人の娘を失った。彼女は、レニングラード・ラジオに出演し、市民をはげまし、詩を朗読した。飢えのため体がむくみだしたとき、出張というあつかいで、1942年3月1日モスクワへ飛行機で運ばれ、4月20日まですごした。モスクワでは最低限度必要な生活条件がととのっていた。電燈がともるだけでも、レニングラードから来た者には喜びであった。レニングラードは全市が前線だが、モスクワは銃後であった。

病人ベルゴリツは、生存条件のこの好転を喜ばない。モスクワに一週間くらただけで、彼女は、自分をモスクワへ送る世話をしたレニングラード・ラジオの編集者で文芸学者のマコゴネンコに不満をぶつける。

「光、暖かさ、風呂、食物——これはみな申し分ありません、しかし、どう説明したらいいでしょうか、これはまだまるっきり生活ではありません——これは便利さの総体なのです。存在することは、もちろん、できます、しかし、生きることはできません。」<sup>(14)</sup>

生命力を全開させる封鎖の生活から安全な後方の住らしに移るのは、ベルゴリツにとって、「自分自身を骨ぬきにすること」である。

泥の、闇の、飢えの、悲しみのなか

死が影のようにつきまとう所で<sup>(15)</sup>

ベルゴリツは「恐ろしい幸福」をかみしめたのである。

これは、恐ろしいほど幸せな状態のことではなく、恐怖のなかでの幸福である。これは、なによりもまず、天職に生きる者が口にするのできる言葉である。なぜなら、これは、一つまちがえば破滅する、死と生とのきわどい攻め合いのなかでの、生の限度ぎりぎりの仕事三昧のことだからである。

これは「精神的健康」の頂点である。

生存条件の非日常化と死の日常化が天職を生守護者にする。

インベルもまた力のかぎり働く。

## 2 天 職

飢えという敵が内部を切り崩し、寒さという敵が外部から襲う。死は、なしくずしにやってくる。死者たちは、白い布にくるまれ、子供用の襦にのせられて、凍てついた道を飢えきった者によって共同の墓穴へつれていかれる。

死相をおびた都市のなかで、インベルの創作熱があがる。

「こんな情熱をもって仕事をしたことは今までなかった。夜ですら横になりながら書く、止まらないのだ。疲労で死にそうだが、それでも思考を続ける。」（1942年1月20日朝）

インベルは、自分の居る地獄について物語詩『プルコヴォ子午線』を書いている。それは現場からの詩による同時中継である。毎日の困難さ、不便さ、恐ろしさのすべてが作品と作者を養う。

「『子午線』は絶好調だ。夜も寝させてくれない、書け、と要求するのである。

ただ健康と力とが足りるように！」（1942年1月20日晚）

零下40度前後の寒さが続く。薪にするために群衆が病院の板べいを持ち去る。電気も水道も止まっている。市民の水の使用量は砂漠の旅人と同じである。

「今にいたるまでパンがない。そのかわり3つの節がうまく書けた。『光と暖かさ』の章のむすびの部分だ。

今までになく書ける。」（1942年1月26日）

インベルは、タイプライターをかたずける。リボンがひどい寒さのために乾いて使えないからである。電気スタンドもかたずける。電気がないから、それは無用である。彼女は、憑かれたように書く。詩句が湧いてくる。

この高揚の最中に、孫が死んだという知らせが入った。赤ん坊は、安全な後方チーストポリへ疎開し、ドイツ軍から遠く離れた所で脳膜炎で死んだ。1才の誕生日前である。孫に贈ろうと用意していたガラガラは、目にするのがつらいので、机の引きだしにしまう。

全般的な災難のなかへわりこんできたこの私的な不幸は、インベルをさらに仕事へと狩りたて追いたてる。51才の祖母は、悲しみを退治するために仕事の鬼と化す。

「何とか自分を制御するために、今は、ひときわたくさん仕事をする必要がある。」（1942年3月12日晚）

人類の創作史は、人生の最悪の日々につくられた傑作をたくさん知っている。不幸の切っ先を創造のみに変えるのは、天職を持つ者の特権である。インベルは、偉人でも天才でもなかったが、生涯で最も密度の濃い創作活動を封鎖下でおこなう力をそなえていた。

1942年7月10日、インベルは52才になった。

「私の誕生日！この一年で私の唯一の個人的な悲しみは、ミーシェンカの死である。もしもこれがなければ、私は、最高の幸せ——戦時に必要なのだと分かった私の仕事を与えてくれる幸せにひたっていただろう。」（1942年7月10日）

しかし、孫ミーシェンカの死もこの幸せの源である仕事への起爆剤になった。

封鎖下で学問も芸術も生きている。

冬のさなかに暖房のない部屋で論文が書かれる。インベルは防空壕のなかでおこなわれた医師の論文審査を記録している。電気がないので審査員たちは石油ランプの下で審議し、学位取得者のために、薄めたアルコールで祝盃があげられた。

音楽会もひらかれている。「寒冷地獄」のなかで楽団員たちは、綿入れや半外套をきて演奏する。第1バイオリンは、ひげぼうぼうである。お湯がわかせないから、あるいは、明りがなければ、ひげがそれないのだろうとインベルは思う。この日はベートーベンの第五交響曲とチャイコフスキの『序曲1812年』であった。日本が真珠湾を攻撃した日である。

作曲家ドミトリイ・ショスタコーヴィチは、1937年から母校レニングラード音楽院で教えていた。音楽院はタシケントへ、レニングラード交響楽団はノヴォシビルスクへ疎開したが、ショスタコーヴィチは留まって作曲に恵念している。第七交響曲の第二楽章を作曲中に封鎖が始まった。

「包囲された都市で、爆弾の下で、今ショスタコーヴィチが交響曲を作曲しているのが私には気がかりだ。」（1941年9月22日）

ショスタコーヴィチは、今、第三楽章にとりかかっている。作曲中に防空壕へかけこんだり、送電がとまったためろうそくの光で仕事をしている。古都キーエフ占領の知らせに心が不安な状態にあるとき、ショスタコーヴィチが自分と同じ状況下で働いていることは、インベルにとって大きな励みである。「屍肉を喰べる鳥」と呼ばれているドイツ軍の飛行機や火焰びんなどの戦争記事のあいだにショスタコーヴィチが登場する。インベルは、戦争に直接かわりあうもの、戦争に不可欠なものと同列に音楽がとりあげられていることを喜ぶ。

「つまり、芸術は死んでいない、それはまだ生きている、輝いている、心をあたためている。」（1941年9月22日）

ショスタコーヴィチは、市防衛委員会の指示にしたがって、作曲中の第七交響曲の楽譜と家族と共に10月1日モスクワへ飛行機で向かった。そこからクイービシエフに移り、作曲を再開し、レニングラードに捧げられたこの曲は12月27日に完成した。

1942年3月5日、第七交響曲は、クイービシエフでポリショイ劇場管弦楽団によって初演された。3月29日には、モスクワのソヴェト会館で演奏され、モスクワへ出張中であつたベルゴリツはこれを聴いた。彼女は、レニングラードについての「涙なしの悲嘆」を聞きとった。レニングラードの苦しみは涙どころではない。曲は、しかし、来るべき勝利へ、歓喜へとむかう。聴衆は起立して、作曲者へ、「レニングラードの息子で守り手」であるショスタコーヴィチへ拍手をおくった。ベルゴリツは、大きなめがねをかけた、小柄できゃしゃな作曲家の姿をながめる。

「この人はヒトラーより強い……」(16)

『独裁者』をつくったチャプリンが独裁者ヒトラーより強いのも同じである。

封鎖の民に捧げられた第七交響曲は、レニングラードで演奏しなければならない。しかし、レニングラード交響楽団も指揮者ムラヴィンスキイもいない。放送局の楽団が残っていたが、多く

の楽団員は餓死したり、あるいは、戦場にいる。大曲を演奏する力はない。演奏できる者を戦場からもよび集めて態勢をととのえ、1942年8月9日、35才のカレル・エリアスベルクの指揮で封鎖下のレニングラード市民のために演奏がおこなわれた。砲撃によって演奏が、その中継放送が邪魔されないように、この日、レニングラード防衛の責任者レオニード・ゴーヴォロフ将軍によって、ドイツ軍の大砲を力のかぎり破壊せよという命令が出されている。戦況は悪い。ドイツ軍が市内へ入ってくる危険性は、日に日に大きくなる。

インベルは、ゆううつである。夏だというのに肌寒い。南では激戦が続いている。ドイツ軍はアルマヴィルへせまっている。「ドイツ軍をまだ止められる」と夫がいった。この「まだ」がインベルの心を凍らせる。のるかそるかの状況下で演奏会がおこなわれる。今のところ、まだ、音楽会をもよおすことができるのである。インベルも聴きにいく。

「戦前や戦争が始まったばかりの頃のように、フィルハーモニイの会場は再び超満員になった。楽団員は興奮している。どうやら、指揮者も。

私は第七交響曲を聴いた、曲の全てがレニングラードのことだと私には思われた。<sup>(17)</sup>敵のタンクが金属音をだしてせまってくる——これはここであったことなのだ。だが、明るい結末はまだ先のことだ。」(1942年8月9日)

第七交響曲は大きな力を発揮した。ショスタコーヴィチは必要であり、芸術は必要である。インベルも自分が封鎖下の人間に必要な仕事をしているという確信によって自分を励げましている。

文学者たちはペンで闘っている。そのなかでも二人のユダヤ人作家ヴァシーリイ・グロスマンとイリヤ・エレンブルクは、ナチズムとの闘いで極めて重要な仕事をしている。彼らの従軍記事は全土で熱心に読まれ、戦時下の民衆の大きな精神的支えになっていた。インベルは、春にモスクワにいるエレンブルクを訪ねた。

「エレンブルクは、誰もまねできない働きぶりだ。日に3篇ずつ記事を書き、晩になるときれいな酒器に入ったぶどう酒をさかずきに一ぱい飲み、長い空色の灰がついている葉巻をくゆらす。そのあとで『赤い星』紙の編集向へ行き、そこで記事を書き、彼がユダヤ人であることをゲッペルスが罵るのをラジオで聞く。

彼は午前2時に帰宅する。朝になると再び同じことが始まる。」(1942年4月25日)

独ソ戦へ外国のユダヤ人から物心両面の援助をひきだすために、ソヴェト政府は、国内のユダヤ人作家、詩人、学者、音楽家等を動員して、宣伝活動を行わせた。ユダヤ人絶滅を計画している勢力と戦っている赤軍へ、ユダヤ人が援助するのは彼らの利にかなっていた。

開戦2ヵ月後の1941年8月24日モスクワで公的な反ファシズム集会がひらかれた。モスクワ・イディシュ語国立劇場の指導者ミホエルスが開会の辞をのべた。マールキシ、マルシァーク、エレンブルク等のユダヤ人文学者や非ユダヤ人のアレクセイ・トルストイも発言し、『全世界のユダヤ人兄弟へ』という訴えがつくられた。

外国のユダヤ人から資金援助をうけるには、ソヴェトでユダヤ人が良い暮らしをしていること、

ユダヤ人差別がないことを示す必要があった。ユダヤ教の活動が許され、ユダヤ教会堂の破壊が中止される。ユダヤ文化がソヴェトで花開いていることを宣伝するためにイディッシュ語による出版が盛んにおこなわれる。

1942年4月反ファショ・ユダヤ人委員会がつくられた。5月24日、第一回総会がひらかれ、ソヴェト・ユダヤ人文化の中心人物、歴史的な名優ミホエルスが議長にえらばれた。ミホエルスと詩人フェフェルは、赤軍への資金援助をこうためアメリカ、メキシコ、カナダ、イギリスへ派遣された。

二人は、アメリカに3ヵ月以上も滞在し、大きな成果をあげた。たとえば1943年7月8日のニュー・ヨークにおける集会では、5万人の参加者が赤軍の働きに拍手をおくった。「彼らは、起立して、ファシズムが地上から消し去られるまでは心を許すまいと誓ったのである。」<sup>(18)</sup>アインシュタイン、ポール・ロブソン、アプトン・シンクレア、リオン・フォイヒトヴァンガーなどの声に和して、ミホエルスとフェフェルの訴えは、アメリカ人にファシズムへの闘争心をかきたてるのに貢献した。

インベルもがんばっている。封鎖下の活動で彼女の株があがる。

インベルの同業者であるモスクワの作家や詩人たちは、戦火をさけてチーストポリに疎開している。そこでは砲撃の音もきこえず、空襲警報もない。ここに娘のジェンナが住んでいる。ここは孫が死んだ場所である。インベルは、モスクワ、カザンと飛行機をのりついで、チーストポリにやってきた。

1942年7月23日、インベルは、僻地のこの小さな町、戦時の隠れ里で講演し、自作『プルコヴォ子午線』を朗読する。壇上にはイサコフスキイ、パステルナーク、セリヴィンスキイ、アセーエフなど全ソ的に有名な詩人たちがならんでいる。イサコフスキイは、極度の弱視のため兵役につけない。彼の詩は、歌になって全国でうたわれている。『カチューシャ』（1938年）、『ともしび』（1942年）など世界的な愛唱歌がある。パステルナークも身体障害者として兵役につけない。彼は、詩壇の第一人者である。インベルには、イサコフスキイの国民的人気も、パステルナークの才能もない。パステルナークは、インベルにとってただ仰ぎ見る星である。

しかし、今、この場ではインベルが主役である。通路まで人でふさがっている超満員の会場で彼女は、まだ完成していない『プルコヴォ子午線』を朗読する。人がつめかけたのは、インベルが千両役者だからでなく、レニングラードの使者だからである。彼女には、封鎖下の苦しみという後光がさしている。

「私は、レニングラードの人びと、女たち、前線の兵士たち、子供たちについて……泣きながら砂で焼夷弾を消していた男の子について、話した。この子は焼夷弾が恐かった。たったの9才である。しかし、泣きながらも、それでも消したのである。

話し終えると、皆が私のほうにおしよせ、私をとりまき、握手した。これはすべてレニングラードのためである。」（1942年7月24日）

詩人インベルでなく、彼女が代表するレニングラードに聴衆は拍手し握手をもとめている。これは、非日常的な苦しみの方が無難な日常性にたいして持つ優越である。日常性が非日常性にひざまずいている。

レニングラードにおける生命の危険性、極端な欠乏、不便さがどれほど大切であるかを、チーストボリの安全な静けさのなかでインベルは実感する。ここでは、インベルは無防備である。自分の根源的な不安をおさえつけてくれる苦しみ、不幸、危険がない。自分のなかに巣くっている恐怖や不安とせめぎあい、せりあい、うまくいけばそれらを張消しにしてくれるような必要な悪条件がない。

チーストポリでは、悪い知らせはまともにこたえる。同じものがレニングラードでは楽にうけとめられる。自分が苦の当事者だからである。

インベルには、文学者の疎開地に指定された静かなチーストポリにとどまりたいという気持はおきなかった。彼女は、レニングラードでは、モスクワやチーストポリよりも、死ぬのも生きるのも楽だということが、ここへ到着する前に分っていたのである。

インベルは、戦闘機に守られながらレニングラードへ帰った。道中でたえず戦闘があった。無事に帰宅して、雑用などで、執筆の空白が数日間できると、仕事の効力がきれてしまう。

「ものすごく体調が悪い。仕事をしていないときは、私はまるで自分の病気に面とむかいあっているようなぐあいだ。病気が一斉におそいかかってくる。一般的にいて、仕事をしているかぎり、自分の身に何も悪いことが起きないような気がする。

働くかぎり——私に弾丸はあたらない

働くかぎり——私の心臓はとまらない」（1942年8月5日）

これは、体を動かして心のうさをまぎらわすたぐいの話ではなく、このさい、仕事とは天職に従事することだけを意味する。

ここであらためて重要なことが確認される。封鎖という極限状況が、いうまでもなく、ひとりでに効力を発揮するのではない。多くの者が状況に負けて、減んでいく。悪条件の下で生命力に点火する能力のある者だけが「精神的健康」を手にする。限界状況下での仕事への没頭は、単に救済的に作用するだけでなく、生命力を根こそぎ動員させる。生命力があますところなく燃焼しているとき、ちょうど野獣が火を恐れるように、その炎へ不安や恐怖は近づくことができない。

封鎖という非日常的状況が仕事の密度を非日常的に濃くする。このありがたさを知ってしまった者には、チーストポリは、気のぬけた空白地帯であり、場合によっては、仕事にとって危険地帯ですらある。

「私は仕事に没頭しているときだけ、心がおだやかだ。しかし、突然、心にゆさぶりがかかる——すると上へまっしぐらに、あらゆる困難にたちむかって、自分が持ち上げられる。」（1942年10月17日）

インベルは、『プルコヴォ子午線』にとりくみ、封鎖下の市民をはげます詩、戦意を高揚させ

る詩を書く。街路の掲示版にインベルの詩『敵をやつけれ』がはりだされている。

敵を灰と煙に化せ！<sup>(19)</sup>

インベルは自作の詩を工場で朗読し、働く者を励ます。ある工場で聴衆を代表して少年工が謝辞をのべた。

「詩が好きですか、と私はたずねた。ちょっとだまってから、彼は答えた。

『でもこれは詩ではありません。これは本当のことです……』

最高の賞賛だ。」(1942年9月16日)

1930年代インベルは、「本当のこと」を書かないことによってスターリン体制に奉仕した。血が流れようと、人が消えようと、「楽天主義」で現実を遮断し、「喜び」を語り歌った。今、封鎖下でインベルは苦しみについて書くことができる。スターリン体制でなく外敵がもたらした苦しみだから、書くことが許される。封鎖が敵ナチズムの侵略の産物だから、その惨状を文字にできる。

しかし、そこに自由はない。制限があり、限界がある。封鎖下で人が飢えていること、餓死したことを記録できる、伝えることもできる。

しかし、ソヴェト人が飢えからおこなうせっぱつまった行動を文字にする自由を、ソヴェト文学は持たない。敵のせいだから苦しみについて書ける、同時に、敵のせいであってもソヴェト人の醜い非人間的な反応は書けない。従って、苦しんでいる真の姿はえがかれぬ。<sup>(20)</sup>ソヴェト体制下では、封鎖についての、独ソ戦についての全体図をつくることは、文学にも科学にも許されていない。それは禁忌である。たとえば、もしも飢えから人肉を食べたことを書けば、検閲で跡かたもなく削られるだけでなく、ソヴェト人にたいする侮辱という政治的犯罪を犯すことになる。

たえず耳をそばだて触角を動かし権力の一举一動を追っているインベルは、このような犯罪を犯さない。彼女が書く封鎖の苦しみは、ソヴェト人の常識、ソヴェトの掟にしたがって、限度内に行儀よくおさまっている。『プルコヴォ子午線』にも『ほとんど3年』にも、人間が堕ちるところまで堕ちた姿などどこにもない。それは淡白ですらある。

しかし、それでも彼女にとっては、封鎖は、ソヴェト人の苦しみを具体的に書ける絶好の機会であった。大きな嘘をつく必要もなく、一定の厳しい制限の範囲内ではあるが、人間を今までよりも生々しくとらえることができたので、詩人インベルにとってレニングラードの生活は、人生の中で最も実りの多い3年であった。

1942年12月7日、『プルコヴォ子午線』が完成する。

この年、インベルの仕事は、2冊の小さな本に結実する。

『レニングラードの魂

詩 1941年9月～1942年6月』

レニングラード 国立文学出版所

40頁 15000部 1 ルーブリ

『長篇詩 プルコヴォ子午線』

レニングラード 国立文学出版所

40頁 10000部 1 ルーブリ50コペイカ

### 3 祭の終わり

『プルコヴォ子午線』の完成を契機にして、インベルは、1942年12月19日入党を申請した。12月23日、党員候補になった。彼女は、もはやソヴェト権力の同伴者でなく、その「身内」である。人一倍ソヴェト的であろうとした必死の、たゆまない努力の賜物である。彼女は、まもなく正党員になって、処世上の目的を達成することになるだろう。

大晦日、新年の祝杯を手にしたまま、インベルは、不動の姿勢で、スターリングラードにおける戦果をラジオで聞く。6週間の攻撃の結果、ドイツ軍の戦死者175,000人、捕虜137,650人、赤軍は現在ドイツの22個師団を包囲している。胸おどるようなこの報道に接して、インベルは、まず、最高総司令官スターリンへ、次に、赤軍のために乾杯する。

正月になると、もっと嬉しいことが起った。1943年1月18日、シリスセリブルクが敵から奪いかえされた。この「鍵の町」の占領によってレニングラードの封鎖が始まったのである。今、ドイツ軍は、「鍵」を捨てて、ラドガ湖の南岸から総退却した。封鎖の一部が破れたのである。レニングラードの首にまきつけられていた輪はまだはずれていないが、ゆるんだのである。

封鎖の突破によって平和はこなかった。ドイツ軍の爆撃はあいかわらずしつこい。しかし、レニングラード市民は狂喜した。インベルも嬉しかった。すると、仕事が後退した。一時的に重しがとれて、気がゆるんだ。

「私には不首尾の短い（そうあってほしいものだが）連らなり。仕事がない。封鎖突破に関連したこれといったものを何も書いていない。祝祭日には自分はいっていない、ということには前から気づいていた。」（1943年1月24日）

生命にかかわる脅威、恐怖、不安が仕事の牽引車であったことがあらためてはっきりする。

爆撃がひどくなる。ほとんど一晩中、警報がなり続けたこともある。ファシストたちは、全線にわたる劣勢のため、レニングラード市民にあたりちらしているのだとインベルは思う。空襲はますますひんぱんになるだろう。

天下わけめの戦いがおこなわれているスターリングラードでは、ドイツ軍は厳寒のなかで赤軍にかこいこまれたが、ヒトラーは退却を許さず、司令官パウルスを元師に昇格させて、死闘の続行を強制した。パウルスは、元師になって2日目、1月31日に赤軍の捕虜になった。パウルスは、ウオッカをもとめ、自分たちを負かした赤軍のために乾杯し、ドイツ本国は喪に服した。

この大敗北はドイツを震撼させた。占領地を赤軍に奪いかえられる危険性がでてきたので、ナチスは、ユダヤ人集団殺害の物的証拠がソヴェトの手にわたるのを恐れて、証拠隠滅の大仕事を



始める。土中から何千、何万のユダヤ人の死体を掘り出し、巨大な炉で焼き、その灰を野や畑にまく。独ソ戦中の最も汚い仕事が始まる。

インベルは、もう一年半も続いている爆撃に体も神経も疲れはて、衰弱している。しかし彼女は横になることを自分に禁じる。

「一千回目、自分にむかってくりかえす、『予定表から脱落』してはならない。

止どまることなしに働く。これが全ての鍵だ。」（1943年2月18日）

インベルは、封鎖下の生活について原稿を書き、それがソヴェト情報局を通じて世界各国に流されている。彼女の詩はラジオで放送され、街路の掲示版にもはりだされる。

封鎖下での活動が評価されて、インベルは、6月8日、レニングラード防衛功労賞をもらった。12月25日には党员候補から正党员になった。1943年は、こうして「終わり良し」となった。

砲撃で家が地震のようにゆれた正月のあと、封鎖網が粉碎された。ほとんど3年ぶりにレニングラードは、人心地がついた。

「レニングラードの生活における最大の出来事。封鎖から完全に解放された。職業的な作家である私に、この場になって言葉がでてこない。私はただ、レニングラードが解放された、というだけだ。この言葉に全てがある。」（1944年1月27日）

午後8時祝砲がうちあげられ、投光器がペトロパヴロフスカヤ要塞の塔を照らしだす。これは、ドイツ軍の火器がもたらした明り以外には、ほとんど3年つづいた闇を破る稲妻であった。

2月1日、インベルは、ブルコヴォ天文台を見に行く。ブルコヴォの高地をはさんで両側にドイツ軍と赤軍との陣地があり、そこは激戦の最前線であった。ブルコヴォ天文台は、瓦礫の山である。焼けただれた木が数本だけ残っている。

しかし時がくれば、塹壕も  
大砲と機関銃の台座も無くなるだろう。  
望遠鏡を再び向けるだろう  
星の黄金の目印に、  
再び讀えるだろう、太陽の勝利を  
光にみちたその力を。

万才！前代未聞の力をもった  
偉大なロシヤの町。  
万才！何万の意志が  
圧縮された力。  
永久に、今から永劫に  
ソヴェト人万才！。

（『プルコヴォ子午線』）

ドイツ軍が市内に入ってくる悪夢に血の凍るおもいをしたユダヤ人インベルは、今、捕虜として市内を連行されていくドイツ兵を現実に見る。

封鎖経験者、レニングラード防衛功労賞の保持者、共産党員インベルには、絵舞台が待っている。レニングラード開放の翌日、1月28日の『プラウダ』に彼女の詩『ネヴァ河の祝砲』がのり、2月初旬にモスクワでひらかれたソヴェト作家同盟幹部会総会で発言し、2月15日、モスクワで催された「レニングラードの夕べ」で話をする。モスクワへは、以前のように戦闘機に守られていくのではなく、汽車で行けるようになった。

「モスクワでは、いつものように、あわただしい。私には多くの出会い、懇談、発言。私の未来はすばらしいが、現在は病気で暗い。体調は最悪だ。幸福になるには頑健さが必要である。」

（1944年2月17日）

封鎖が病気をつくり、封鎖との闘いが病気をねじふせた。封鎖が解け、闘いが止むと、病気がいっせいに鎌首をもち上げる。

「静けさ、やすらぎ、『警報』と砲撃がないこと、この全てが私には変に作用する。あきらかに、安心感にもすぐには慣れないのだ。

この静けさのなかでは仕事ははかどらない。ただ私の病気だけが活気づき、多彩である。封鎖のあいだにひどくなっていたありとあらゆる病気が、今となってはじめて本格的に人を襲ったのだろう。このようにこぼすのが私だけでないのは面白い。」（1944年3月24日）

4月10日には生まれ故郷オデッサが開放された。国全体が勝利にむかって確実に進んでいく。

「ひどい健康状態。私はまいってしまった。タイプライターをたっぷり服用しようか。『イズヴェスチャ』のために『時は来た』を書こう。」（1944年4月24日）

書くことが最良の治療である。タイプライターはインベルの常備薬である。

「仕事につく。これは、あたりはずれの無い一番たしかな総合鎮痛剤である。」（1944年4月29日）

インベルの本拠はモスクワである。封鎖が終わり、夫も職を辞し、夫妻はモスクワへ帰ることになる。封鎖が解除されたので疎開地から帰ってくる者とは逆に、インベルは、封鎖が終わったので去っていくのである。

1944年6月6日、アメリカとイギリスの連合軍は、フランスのノルマンジー海岸に上陸した。これは第二次大戦中最大の上陸作戦であり、ドイツは敗北にむかって転落していく。第三帝国の命運はあと11カ月でつきることになる。

翌日、『ほとんど3年』の最後の頁が書かれる。

「さようなら、レニングラード。この全期間をここですごした者の記憶からお前を消し去る物は、この世に存在しない。」（1944年6月7日）

インベルにとって、命の祭が終わった。

やがて戦争が終わり、スターリン体制の日常が復活すると、1930年代のおなじみの恐怖が再び彼女の主人となって、書く材料も書き方も指示するようになるだろう。

注

第一部

- (1) Ольга Берггольц. Стихи. Проза. Гослитиздат. Ленинград. 1961. с.428.
- (2) Вера Инбер. Избранное. Гослитиздат. Москва. 1950. с.375.
- (3) Там же. с.428.
- (4) Алесь Адамович. Даниил Гранин. Я из огненной деревни...  
Блокадная книга. "Советский писатель". Москва. 1991. с.665.  
以下の引用にあたっては、この書名をБКと記す。
- (5) БК. с.471.
- (6) Там же.
- (7) БК. с.493.
- (8) Варлам Шаламов. Колымские рассказы. Книга вторая. "Советская Россия". Москва. 1992. с.166-167.
- (9) Вера Инбер. Избранное. с.184.
- (10) БК. с.469.
- (11) Варлам Шаламов. Колымские рассказы. Книга первая. с.111.
- (12) БК. с.482.
- (13) БК. с.475.
- (14) Роберт Конквест. Жатва скорби. Overseas Publications Interchange Ltd. London. 1988. с.415-416.
- (15) БК. с.635.
- (16) БК. с.691.
- (17) БК. с.606.
- (18) БК. с.643.
- (19) БК. с.649.
- (20) БК. с.658.
- (21) Там же.
- (22) Там же.
- (23) БК. с.661.
- (24) Там же.
- (25) Там же.
- (26) БК. с.713.
- (27) БК. с.604.
- (28) БК. с.406.

## 第 二 部

- (1) ジェンナはインベルの娘、男の子は孫
- (2) Почти три года の引用はすべて  
Вера Инбер. Избранное. Гослитиздат. Москва. 1950. からおこなう。
- (3) Ольга Берггольц. Стихи. Проза. с.426.
- (4) たとえば、1988年1月9日死んだ宇野重吉が、87年12月、背おわれて楽屋いりし、ふんだ舞台（武者小路実篤作『馬鹿一の夢』東京三越劇場）は、この典型例である。
- (5) 独ソ戦中のスターリンの変身または演技の一例。1943年9月4日、スターリンは、ロシア正教会の最高位にある3人の高僧と会見した。彼は、正教会の戦争協力に感謝し、教会がおかれている困難な状況に理解をしめし、高僧たちが市場で高い値段で食物を買っていることにまで心配してみせ、食物を供給しようと申し出た。僧たちは丁重にことわった。  
／В. А. Алексеев. Иллюзии и догмы. Политиздат. Москва. 1991. с.339-346.／
- (6) ヴァシーリイ・グロスマンも類似の考えをもっていた。セミョーン・リーブキンは、グロスマンが戦争中にいった言葉を伝えている。  
「この戦争は、彼の意見によれば、ロシアからスターリンの汚れを全てぬぐい去るのだ。この戦争の聖なる血は、罪もないのに撲滅された農民たちの血や1937年の血をわれわれから洗いおとしたのだ。」  
Семен Липкин. Сталинград Василия Гроссмана. Ardis. Ann Arbor. 1986. с.15
- (7) ニコライ・イヴァーノヴィチ・エジョーフ（1895—1940）は、ペテルブルク出身の労働者で、1922年から党の仕事につく。1935年2月に党中央委員会書記となる。1936年9月から内務人民委員となり、いわゆる「大粛清」をスターリンの指示でおこない、血が流れすぎたあと全ての責任をかぶせられて、1940年処刑された。ペリヤとならんでスターリン体制下の政治犯罪の最大の下手人であり、同時に、スターリンによって使い捨てにされた犠牲者である。
- (8) Борис Пастернак. Собрание сочинений в пяти томах. “Художественная литература”. Москва. 1990. т.3. с.499.
- (9) Там же. с.295.
- (10) Варлам Шаламов. Колымские рассказы. Книга первая. с.195.
- (11) Борис Пастернак. т.3 с.499.
- (12) 独ソ戦が始まった時点でソヴェトには500万から530万人ほどのユダヤ人がいた。ナチスは、そのうちの150万人ほどを殺した。
- (13) Черная книга о злодейском повсеместном убийстве евреев немецко—фашистскими захватчиками во временнооккупированных районах Советского Союза и в лагерях уничтожения Польши во время войны 1941—1945гг. Под редакцией Василия Гроссмана и Ильи Эренбурга. Tarbut Publishers. Jerusalem. 1980. с.87.
- (14) Вопросы литературы. 1978. №5. с.213.
- (15) Ольга Берггольц. Стихи. Проза. с.318.
- (16) Там же. с.387.
- (17) 封鎖の最中にこの曲を聴いて、独ソ戦についての作品だと感じるのは、自然である。まさにこの年1942年に執筆されたマルトウイノフのショスタコーヴィチ論にも、ファシストの進撃、悪夢の状況、それにたいするソヴェト人の戦いを表現したものだと言われている。そして、「第七交響曲の中心思想は、創造と破壊の力、文化と野蛮の力、人間愛と非人間的残酷さとの衝突である。」  
／И. Мартынов. Дмитрий Шостакович. Музгиз. Москва—Ленинград. 1946. с.73.／  
これは、ソヴェトにおける公的見解であり、一般的にも、また海外でも、この解釈が定着しているようである。  
これに対してアメリカの音楽記者ヤン・マクドナルドは、このような解釈をつくられた伝説だとみなす。

たとえば、出だしの「平和な幸福な生活」は、社会主義リアリズム風のつくりごとだと彼は考える。それが、ドイツ軍の侵入以前は光で、以後は闇だという嘘にもとずいているからである。

(Ian MacDonald. The new Shostakovich. Northeastern University Press. Boston. 1990. Chapter Five.)

ナチズムとスタリニズムの両方の悪に対してどのような立場をとったかは、ソヴェトの芸術全体に関係する重要問題である。

(18) С.М. Михоэлс. Статьи, беседы, речи. "Искусство". Москва. 1960. с.214.

(19) Вера Инбер. Избранное. с.51.

(20) 一般的に、くらい話はいけない。オリガ・ベルゴリツがモスクワ放送で封鎖について話すさい、飢えについては一言も話すなと釘をさされた。

／Вопросы литературы. 1978. №5. с.215.／

いうまでもなく、飢えぬきの封鎖の話は、モスクワ放送が望んでいるレニングラード市民の英雄的行動そのものを骨ぬきにしてしまう。

(1993. 9 .20 受理)